

2011年度卒業論文紹介

奥田麻友香

チャット・コミュニケーションの日独比較 —— テキストにおける表現スタイルを中心に ——

私たち人間は、社会的な生活を営んでいる限り、毎日のようにコミュニケーション活動を行い、多くのメッセージを発信している。高度情報化社会の現状において、メディアテクノロジーが様々な形で進化を遂げ、コミュニケーションの形態が多様化していることから、コミュニケーションそのものは常に社会の動きと連動しているということがうかがわれる。そして、近年のインターネット利用者の世界的な増加に伴い、コンピュータ媒介コミュニケーション（Computer-Mediated Communication: CMC）も多様化している。日本においてもドイツ語を母語とする諸国においても、その事情は変わらない。倉田芳弥（2004: 58）によると、チャットとは、コンピュータネットワークを通じてリアルタイムに文字ベースの会話を行なうシステムであり、そこでの会話は CMC の一つである¹。このチャットという一種のコミュニケーションツールを用いることによって、遠方にいる人々ともほぼリアルタイムで会話を行うことができる。また、松田美佐（2008: 44）は、チャットにおける会話のやり取りを『『しゃべるように』『思いつくままに』メッセージが交わされ』²と表現している。このように、インターネットの普及に伴い、人々の会話の場も電子化する傾向にある。そして、それは同時に「音声による

1 倉田芳弥「日本語母語話者同士による一対一のチャットの会話の開始部：構成要素とその順序を中心に」、『言語文化と日本語教育』28、お茶の水女子大学日本語文化学会、2004、58。

2 松田美佐「ケータイ／ウェブの表現スタイル」、『言語』37-(1)、大修館書店、2008、44。

会話から文章による会話への移行]³を示唆する。

また、伊藤雅光は「『チャット』と呼ばれる“電子おしゃべり”について」(1993: 61)の中で、チャット言語を「限りなく話しことばに近い文字言語」⁴として位置づけている。つまり、文字列で表された文章で行われるコミュニケーションであるという点においては書きことばに近いが、その話しことばの特徴の多さを考慮すると、概念的には話しことばにかなり近い言語ということになる。次に挙げる白井宏美(2005: 112)のモデル⁵は、チャット言語のそのような特徴を明確に示している：

チャット言語の位置づけ

		概 念	
		← 話しことば性	書きことば性 →
媒体が文字	デジタル伝達	チャット 携帯メール Eメール	
	非デジタル伝達	グリーティングカード	法律文
媒体が音声	デジタル伝達	電話	
	非デジタル伝達		講演

(出所：白井宏美「チャット・コミュニケーションの日独比較——コンピュータメディアによる【会話】の交わり方——」、杉谷真佐子、高田博行、浜崎桂子、森貴史〔編〕『ドイツ語が織りなす社会と文化』、関西大学出版部、2005、112.)

このように、チャット言語は他のどのデジタル言語と比較してみても、より話しことば性が高いのである。では、何故チャットがこのような特殊性の高いところに位置づけられるのだろうか。それは、チャットがこれまでのコミュニケーション手段にはないユニーク性を有している点に

3 安藤秀哲、高橋勇、黒岩文介、小高知宏、小倉久和「チャットにおける会話の特徴と会話エージェントの検討」、『福井大学工学部研究報告』50-(2)、福井大学工学部、2002、174。

4 伊藤雅光「『チャット』と呼ばれる“電子おしゃべり”について」、『日本語学』12-(13)、明治書院、1993、61。

5 Dürscheid, Christa: *Einführung in die Schriftlinguistik*. Wiesbaden: Westdeutscher Verlag, 2002, 59のモデルを白井が日本語に訳して示した。

ある。伊藤（1993: 55）は、このユニーク性について、「文字言語でありながら『即時性』と『双方向性』をもっている点にある」と指摘している。つまり、ある情報を発信するとともに受信し、即時にまた新たな情報を発信するという点である。チャットにおいては、送信者と受信者は時間を共有しており、送信者が情報を送信するとすぐに受信者はそれをディスプレイの画面において読み取り、理解するのである。このような点において、チャットのことばは文字言語ではあるが、書きことばというにはあまりにも話しことば的要素が濃厚な特徴をもっている（ibid.: 61）とすることができる。

本稿では、このようなメディアテクノロジーの進化が生みだしたチャットを媒介としたコミュニケーションに着目し、その言語的特徴、非言語表現（視覚的記号など）を分析することで、こうしたチャットの特性が言語表現や言語現象にどのような影響を与えているのか、あるいは「限りなく話しことばに近い文字言語」として位置付けられているチャット・コミュニケーションの実態の一端を、日本語とドイツ語で比較対照することにより論述している。

日本語において顕著に見られた特徴としては、古語語法、幼児語法、あるいは方言語法による語彙的・文体的ずらしが挙げられる。そして、これは一種のコード・スイッチングであり、「意図的な文体逸脱によることば遊び」⁶でもある。また、通常はカタカナで書かれることばをひらがなで書くといった表記法の切り替えもコード・スイッチングを用いた遊びであると考えられる。このようなスイッチングの種類は日本語においては豊富であるが、ドイツ語においては、全体を一貫した大文字書き、小文字書きにする、あるいは文字・記号の繰り返しをするといった程度で、その種類はそう多くない。また、日独双方において、頻繁に現れる視覚的記号が句読点の役割をも担うのに加え、日本語では長音符号を用いた文末伸ばしも多く見られた。それに対し、ドイツ語において顕著に見られた特徴としては、短縮語・省略語などが挙げられる。ま

6 渡辺学「ドイツメディア言語学の現況—携帯メールテキストの日独比較を出発点に」、岡本能里子、佐藤彰、竹野谷みゆき（編）『メディアとことば』3、ひつじ書房、2008、16。

た、日本語では感情を表す際に多種多様なエモティコンが使用されるのに対し、ドイツ語ではエモティコンはほとんど使用されず、エモティコンの代わりに動詞語幹辞が多用されているのもその特徴のひとつと言える。

しかしながら、本稿全体を考察して見えてくるのは、周知のように、「歴史比較言語学的には全く語族を異にする日本語とドイツ語という個別言語（ラング）の枠」⁷を越えて、チャット・コミュニケーションを含むCMCにおける文字言語には、形式的にも機能的にも共通性があることである。今後、語用論、談話分析、会話分析、社会言語学などの様々な視点からのアプローチを加味することでさらに細かく検討を重ねれば、言語あるいはコミュニケーションに関するより総合的で本質に迫る知見が得られることになるであろう。

藤川 侑子

ドイツ語における外来語 —— 増加する英語系外来語 ——

今日、日本語においてたくさんのカタカナ語が使われているように、ドイツ語においてもたくさんの外来語が使われている。その中でも特に顕著なのが、英語系外来語である。この多すぎる英語系外来語は、最近では *Denglisch* と呼ばれ、ドイツ語における英語風の語彙や言い回しに対する蔑称として使われている。本論では、ドイツ語における外来語を定義づけし、その歴史を見ていくほか、今日 *Denglisch* が蔓延するにいたった経緯を様々な観点から考察した。そしてドイツ語話者が、年々急速に増え続けている *Denglisch* とどう向き合っていくべきかについても考えた。

まず、外来語とは「ある別の言語から自分自身の言語へと借用された

7 渡辺学「携帯メールの日独語比較対照——文字と視覚的記号によるコミュニケーションのあり方——」、杉谷眞佐子、高田博行、浜崎桂子、森貴史（編）『ドイツ語が織りなす社会と文化』、関西大学出版部、2005、108。

語、また、いまだに字面や発音で外国の印象を与える語」とされている。語を母語でないものとして特徴づける目印として構成要素、音、綴り、日常会話でのまれな使用の四つが挙げられる。外来語はたいていこれらの特徴の一つ以上を持っている。しかし外来語がドイツ語に組み込まれるとき、音や綴りがドイツ語風に変えられるなどの同化現象が起こる。このようにして本来のドイツ語と外来語との境界は時に不確かであり、実際には外来語の定義はいまだに曖昧である。

さて、ドイツ語における外来語の中で大部分を占めているのがラテン語系、フランス語系、そして英語系外来語である。特に古くからあるのがラテン語系であり、ドイツ語は歴史上3回ラテン語の大波をかぶった。一度目は紀元元年前後、二度目は8世紀、そして三度目は16世紀である。フランス語系においては、1150年～1250年に一度目のフランス語の波が、30年戦争の終結(1648)からフランス革命、そしてナポレオン時代へと至る約160～170年間に二度目の波が来た。英語系外来語が飛躍的に増加したのは第二次世界大戦後、主にアメリカからである。

英語からドイツ語に流入した語彙は、一般的に *Anglizismus* または *Amerikanismus* と呼ばれている。*Denglisch* は *Deutsch* (ドイツ語) と *Englisch* (英語) からなる混成語であり、ドイツ語における英語風の言い回しや語彙に対する蔑称として使われており、言語批評から生まれた評価的な概念である。英語に起源を持つ外来語や、英語から借用したフレーズのことを指す *Anglizismus* が客観的な基準で導き出され、中立的で価値判断を伴わないのに対し、*Denglisch* は科学的な基準で規定することができず、主観的判断で用いられる。*Denglisch* の具体的な例として、インターネット上でよく使われる *hochladen* に対する *uploaden* (アップロードする)、*herunterladen* に対する *downloaden* (ダウンロードする) などがある。日常生活では、若者がよく使う *okay* や *cool*、*shit* などがある。

英語がヨーロッパだけでなく、世界でも重要な言語であると認識され、その重要度が年々増加するにつれ、相対的にドイツ語やフランス語などへの関心が低下している。フランスでは1960年代から、英語による科学・技術関係の新しい専門用語が次第に増加していき、それらは *Franglais* (*Français* と *Anglais* の混成語) と呼ばれた。こうした傾向に対抗すべく、

1970年代にフランス政府は、さまざまな専門分野のフランス語による用語を定め、担当各省の省令として相次いで出した。1994年には、フランス議会が「フランス語使用法」(トゥーボン法、Loi Toubon)を制定した。このように、フランスではフランス語の保護を目的とした言語政策が国によって行われている。その成果は必ずしも成功しているとは言い切れないが、トゥーボン法により、少なくともフランス語と外来語に対する国民の意識が変わるほか、多すぎる英語風の言い回しを意識することとなるだろう。

他方、ドイツでは国単位でのドイツ語の保護政策は行われていない。かろうじてドイツ言語協会(Verein deutsche Sprache)がDenglischに関するインターネットサイトを設けており、Denglischを解説するとともに、それに対して何ができるかを挙げるなど、Denglischに対して批判的な態度を取っている。ドイツ語に対して国単位で保護政策が行われていない背景には、第二次世界大戦が深くかかわっていると言える。戦後のドイツ人はナチスの犯罪に責任を感じており、外国語を排除し、ドイツ語を保護することに対して消極的なのである。

英語系外来語の増加には、戦争の歴史だったり、アメリカ文化への強い憧れや、ドイツの学校における英語教育が関係しているだろう。また、ドイツ語も英語も、もとはインド・ヨーロッパ語族に属している。歴史的に見ると、第一次子音推移でインド・ヨーロッパ語族からゲルマン語が分かれ、その後、第二次子音推移によってドイツ語が他のゲルマン語、つまり英語・オランダ語等から区別された。こうした歴史の変遷による違いはあるものの、英語とドイツ語はその成り立ちからいって極めて似ており、ドイツ語を母語とする者にとって、英語は習得しやすい言語である。ドイツ人が進んで英語を取り入れる背景には、こうした両言語の類似性があると言える。

ドイツで問題となっているのは、「英語が話せる=かっこいい」という風潮である。そのため、英語を流暢に話せる人は会議などにおいて英語で話そうとするし、英語をそれほどうまく話せない人でも、ドイツ語の中に英語の語彙を織り交ぜて話そうと努める。これはまさに、17世紀のフランス語の使用と似ている。また、ドイツ語圏の人は言語に対して怠惰になっており、外来語に適切なドイツ語訳を探るのを面倒くさがり、

輸入した言葉をそのまま使ってしまう傾向が強い。これは、日本においても同じではないだろうか。ドイツ語における外来語の増加と、ドイツ語を外国語として学んでいる人の減少には関係がないとは言い切れない。ドイツ語における英語系外来語が増加すると、英語を知っている人には語彙が覚えやすいという利点がある反面、語の綴りと発音にずれが生じてしまう。ドイツ語を母語とする人たちが今後もお英語風の語彙や言い回しを進んで取り入れていけば、外国語としてのドイツ語の価値は低下の一途をたどるであろう。どうしてこのような状況下で、ドイツ語を学びたいという人が増えるだろうか。国際社会で英語の使用がますます増加し、Denglischが蔓延する中、ドイツは今一度、ドイツ語保護政策を行うべきではないだろうか。そのためには、学校教育で外国語教育だけでなく、国語教育にも力を入れるべきである。EUでは2005年以降、早期外国語教育の義務化が増えてきており、ドイツでも日本と同様、さらなる早期外国語教育の導入の是非が問われているが、まずは、ドイツ語を母語とする人たちがドイツ語に誇りを持ち、正しいドイツ語を話すことが重要であろう。